

遣唐留学生と日本文化の形成

古瀬 奈津子

はじめに

日本古代の国家や文化が、中国の影響によって成立したことは周知の事実である。中国と外交関係を結び、国家の諸制度や文化を学ぶために、遣隋使や遣唐使が派遣された。日本の律令国家の成立と直接的な関係にあるのは遣唐使である。そして遣唐使一行の中で、国制や文化を学ぶことが任務であったのが留学生・留学僧である。本稿では、遣唐留学生について遣唐使一行の中での位置づけ、留学生の学問について概観しながら、遣唐留学生が日本文化の形成にはたした役割について考えてみたい。

まず、遣唐留学生について考えていく上で前提となる遣唐使の構成をみておこう。遣唐使は四等官以下から構成される一種の官司のようなものであった。まず、上層部として、大使・副使・判官・録事の四等官がいた。つぎに、史生・雑使・僭従という下級官人がいる。さらに、訳語・新羅奄美等訳語・主神・医師・陰陽師・卜部・射手・音声長などの、専門職員ともいべき人たちがいる。中国語の通訳である訳語のほかに、新羅・奄美等の通訳がいるのも興味深い。ついで、船自体を管理したり運航する知乗船事・船師・船匠・舵師・挾抄・水手長・水手がいた。そして、留学者である留学生（長期留学生）・学問僧（長期留学僧）・請益生（短期留学生）・還学僧（短期留学僧）がいた。最後に、技能者である音声生・玉生・鍛生・鑄生・細工生がいる。技能者たちは遣唐使一行の旅程においても働いたと思われるが、唐で技能をさらに磨く場合もあったと考えられる。

さて、本稿で取り扱う留学生・請益生については姓名のわかる人は極めて少ない。一方、僧侶の留学者である学問僧・還学僧については名前が判明する場合も多い。仏教関係については独自の史料があり、名前や経歴がわかることが多いが、帰国後、官人になることが一般である留学生・請益生については時代がたつと姓名が忘れられていくのである。古代の国分寺が後世まで残っていたり、その遺構が知られるのに対し、国府については時代が下ると場所がわからなくなってしまうのと同じ原理かもしれない。本稿では、数少ない姓名の判明している留学生・請益生を対象に考察を行うことをはじめにお断りしておきたい。

1 遣唐使集団における留学生の位置づけ

遣唐使集団において留学生・請益生だけが学問や技能を学ぶ役割を担っていたのではなかった。遣唐使の四等官のうち、判官が請益生を兼ねていたのではないかと考えられる例がある。

まず、あげられるのは、承和の遣唐使のうちの伴宿禰須賀雄である。伴宿禰須賀雄は、『入唐求法巡礼行記』承和五年（開成三年）八月二十五日条には「吉備掾」とみえるが、十月四日条の遣唐大使以下が都長安に入京するために出発する時には、入京人の中に「請益生伴須賀雄」とあり、請益生であったことがわかる。ところが、承和六年三月二十五日条の遣唐使帰国に際しては、「第五船伴判官」とみえ、四月四日・五日条には他の判官とならんで「第八船頭伴宿禰」とある。これは、請益生であった伴宿禰須賀雄が判官（准判官）を兼ねていたのか、遣唐使派遣中に判官（准判官）になったのだと考えられる。

帰国後は、まず『続日本後紀』承和六年八月甲戌条に、遣唐大使の帰京に際し、「宜以大使常嗣朝臣為第一船、令備後権掾伴須賀雄、知乗船事春道永蔵兩人相随之」とあって、大使藤原朝臣常嗣に備後権掾伴須賀雄と知乗船事春道永蔵を従わせている。『続日本後紀』承和六年十月己酉朔条では、

天皇御紫宸殿、賜群臣酒。召散位従五位下伴宿禰雄堅魚、備後権掾正六位上伴宿禰須賀雄、於御床下、令圍碁。並当時上手也。（中略）亦令遣唐准判官正六位上藤原朝臣貞敏彈琵琶。群臣具醉。賜祿有差。

とあって、やはり遣唐使とともに入唐したことのある伴宿禰雄堅魚と天皇御前において囲碁しており、「並当時上手也」とある。伴宿禰須賀雄は請益生であるが、学問というより、囲碁の技能に長けており、そのための請益生であった可能性がある。

その後、伴宿禰須賀雄は、紀伊介、縫殿頭、但馬介（縫殿頭）、但馬守（縫殿頭）、主殿頭、因幡権守などを歴任し、元慶六年正月七日には従四位上に至っている。『続日本後紀』に遣唐判官（准判官）とみえない点が不審であるが、『入唐求法巡礼行記』には「判官」とみえ、遣唐使在唐中は判官（准判官）として扱われていたことは確かである。

なお、承和六年十月朔日に、同じく天皇御前に召されて琵琶を弾じている藤原朝臣貞敏も承和の遣唐使の准判官であった。貞敏の場合は請益生を兼ねているわけではないが、琵琶の名手であり、『入唐求法巡礼行記』によると、上京はせず揚州における留守番役で、上京した遣唐使一行が戻るのを待っている間に、開元寺北の水館で、州から派遣された琵琶博士・廉承武から琵琶を伝習し、学業修了に際して琵琶譜を贈られている（宮内庁書陵部所蔵『琵琶譜』奥書）。『日本三代実録』の卒伝で都長安に上ったことになっているのは、帰国後やはり都長安に上ったことがステータスになるからであろう。

承和遣唐使の場合、判官（准判官）ではないが、請益生を兼ねていた例がほかにみえることが注意される。『続日本後紀』承和八年正月甲午条によると、遣唐陰陽師兼陰陽請益生正八位上春苑宿禰玉成とみえ、玉成は遣唐使一行の陰陽師であったが、陰陽請益生を兼ねていたことがわかる。

また、判官（准判官）が囲碁や琵琶などの技能以外に、学問に優れていた例も指摘できる。た

たとえば、承和の遣唐使判官であった長岑高名についてみると、『日本文徳天皇実録』天安元年九月丁酉条卒伝には、

結童入学、年廿一、始為文章生。(中略)承和元年春二月為遣唐使准判官。二年春正月叙外從五位下。二月兼為大膳亮美作權介。三年從大使參議正四位下藤原朝臣常嗣、乘第一船。船上雜事、大使委任。夏四月更於難波三津浜、追叙從五位下。邂逅屆大唐揚州海龍縣桑田郷梓浦上。來朝長安。于時依無副使、被許上殿。承和六年歸于本朝。秋九月叙從五位上、為次侍從。冬十月除伊勢權介。

とあって、文章生出身で学問があり、かつ遣唐大使藤原常嗣の乗った船の雑事を任せられるなど実務にも勝れ、都長安にも上り、副使がいなかったので宮城で上殿を許されている。『入唐求法巡礼行記』には、「長岑判官」として類出する。なお、『入唐求法巡礼行記』承和六年（開成四年）四月一日条にみえる「記伝留学生長岑宿禰」は、佐伯有清氏によって高名の僊從と考えられている（『日本古代氏族の研究』吉川弘文館、1985年）。

高名は帰国後、嵯峨院別当、山城守、阿波守、伊勢守、播磨守などを歴任し、正四位下右京権大夫兼山城守で卒している。

この他、延暦の遣唐判官であった菅原清公は、菅原道真の祖父にあたるが、やはり文章生出身の学者であり、嵯峨朝には文章博士として天皇の顧問にあずかり、唐風化政策を推進した。延暦の遣唐准録事であった朝野鹿取も文章生出身の学者であった。

以上のように、遣唐判官は、単なる事務官ではなく、学問や技能に勝れている人が選ばれている例が多くみえ、唐においてそれらの学問や技能についてさらに学ぶことも彼らの任務のひとつであったと考えられる。遣唐大使・副使が学者、文人であることはよく知られているが、判官の場合も同様であり、時には請益生を兼ねていたこともあったのではないかと推測される。

承和の遣唐使の場合、『入唐求法巡礼行記』が残されているので詳しいことがわかるが、正史にはふつう六位以下の判官クラスについては記載されていない。しかし、承和以外の遣唐使でも、判官が請益生を兼ねた場合があったのではないかと推測される。

2 留学生の学問

遣唐留学生はどのような学問を学ぶために派遣されていたのだろうか。遣唐留学生一覧（別表）をみながら考えていきたい。前述したように、遣唐留学生で姓名のわかっている人はきわめて少なく、何を学んできたのかよくわからない場合も多い。しかし、数少ない例からみていっても、遣唐留学生の学問には、時代によって変化があることが判明する。

初期から延暦の遣唐使までの留学生にとっては、明経（儒教）が主要な学問であったことが遣唐留学生一覧（別表）からわかる。たとえば、白雉四年出発した遣唐留学生であった坂合部連石積は、帰国後、新字一部四十四巻を撰しているが（『日本書紀』）、これは中国の典籍を読むための辞書であったと考えられる。この場合は明経（儒教）そのものではなく、経典を読むための準備と言えよう。

養老元年出発した遣唐留学生である吉備真備は、唐の鴻臚寺において、国子監四門学教官から

出張講義を受けたことが『旧唐書』日本伝にみえる。国子監は唐における大学で、五品以上の子孫のみ入学できる太学、六・七品の子弟のみ入学できる四門学など出身によって入学できる学校が異なっていた。吉備真備の場合、出身が下道氏という地方豪族なので太学などには入学できず、四門学教官からの出張講義を受けるという形態をとったものと考えられている（東野治之『遣唐使船』朝日選書、1999年）。薨伝によると、唐国において我が国の学生で名が聞こえたのは、吉備真備と阿倍仲麻呂だけであったと言う（『続日本紀』宝龟十月壬戌条）。

阿倍仲麻呂は、ただ一人日本人で唐の科挙に合格して、唐朝に仕えた官人であった。阿倍仲麻呂の場合、国子監太学で学んでいる（『続日本紀』など）。これは、仲麻呂の父船守が正五位上であり、その出身が唐においても準用されたと考えられている（東野治之『遣唐使船』）。

膳大丘は、天平勝宝四年出発の遣唐留学生で、唐の国子監を参観し、帰国後、大学助教となっている。神護景雲二年七月、孔子を文宣王と号することを奏上して聴かれた（『続日本紀』『令集解』学令3条）。

藤原刷雄は藤原仲麻呂の子どもで、天平宝字の遣唐留学生に選ばれたが、この遣唐使は実際には入唐しなかった。刷雄はその後、大学頭などになっているので、学者であったことは確かであろう。

伊予部家守は、宝龟八年出発の遣唐留学生であるが、唐において『五経大義』『切韻』『說文解字』の字体を学び、帰国後、大学助教となり、孔子の享座を南面に定めた（『日本紀略』延暦十九年十月十五日条）。

以上のように、唐の国子監が支配イデオロギーである儒教を主に教授する教育機関であったことにより、唐の諸制度を継受した日本の律令国家では、まず唐の支配イデオロギーを受容するため、留学生・請益生も儒教を学んだと考えられる。

その他、律令国家の初期には、留学生・請益生で法律を学んだ例も見られる。大和長岡は、養老年元出発の遣唐留学生であるが、唐で刑名の学を学び、帰国後、刪定律令二十條を定めたことで著名である。秦大麻呂は、天平五年出発の遣唐請益生かと考えられ、帰国後、問答六巻を献上している（『続日本紀』）。この問答を律令に関するものであるとし、秦大麻呂を大宝令の注釈書である「古記」の作者に比定したのは、青木和夫氏である（『日本古代の政治と人物』吉川弘文館、1977年）。

遣唐留学生の学問に変化が見え始めるのは、延暦二十三年出発の遣唐留学生である橘逸勢からである。橘逸勢は、入唐して明哲に業を受け、「唐中文人、呼為橘秀才」とみえる（『禰逸勢伝』）。また、能書で有名で、三筆の一人に数えられる。橘逸勢が文章生出身であったかどうかよくわからないが、前述したように、延暦の遣唐判官菅原清公や准録事朝野鹿取は文章生出身者であった。留学生の学問が儒教の經典を学ぶ明経から歴史や文学を学ぶ文章へと変化していく端緒となったと言えよう。

承和五年出発の遣唐留学生から、学問の新傾向が明確化する。一つ目としては、暦、陰陽、天文の留学生・請益生が見えることである。まず、前述した陰陽師兼陰陽請益生であった春苑玉成がいる。また、入唐予定であったが、亡匿のため流刑となった暦請益生の刀岐雄貞、同じく暦留学生佐伯安道、天文留学生志斐永世の名が『続日本後紀』承和六年三月丁酉条にみえる。暦、陰

陽、天文の留学生・請益生の初見記事である。ここから、学問の多様化、技術の重視をうかがうことができるのではないだろうか。もちろん、承和の遣唐使については『入唐求法巡礼行記』が残されているため、事情が詳細にわかるということもあるが、それまでの正史にはみえない暦、陰陽、天文の留学生・請益生の記事が『続日本後紀』にみえることは、留学生・請益生の学問が分化する傾向にあったことを示していると言えるのではないだろうか。

それは、たとえば、養老の遣唐留学生であった吉備真備の場合と比較するとよくわかるだろう。真備が唐から将来した書籍は、儒教の經典だけでなく、音楽や兵学、天文学などにおよんだ（『続日本記』天平七年四月辛亥条）。真備が兵学に優れていたことは大宰府における新羅に対する記事からも明らかのように、単に書籍を将来しただけではなく、入唐中の学問が多分野にわたっていたことが推測できる。それに対して、承和の遣唐留学生・請益生の場合は、学問分野が分化していたことがわかる。

承和の遣唐留学生からみえる学問の新傾向の二つ目としては、儒教を学ぶ明経については請益生が一人しかみえないことである。かつ、その請益生については帰国後の活動が見えない。すなわち、留学生・請益生にとって儒教を学ぶことは最重要事項ではなくなったのであろう。この後、中国においては儒教の革新が行われるが、日本がそれを受容することはない。日本においては、遣唐使当初に受容した儒教がそのまま通用していくことになる。儒教の受容の硬直化と言えよう。遣唐使廃止後も常に中国に僧侶を派遣して新しい動向を受容していく仏教との違いがここにみえる（小島毅『海から見た歴史と伝統』勉誠出版、2006年）。

承和の遣唐留学生の学問の新傾向の三つ目としては、文章生出身の副使・判官・留学生がいることである。入唐はしなかったが副使の小野篁、前述した判官の長岑高名、『入唐求法巡礼行記』承和六年（開成四年）四月一日条にみえる「記伝留学生長岑宿禰」（佐伯有清説では長岑高名の僭徒）などである。これは、日本国内における文章科の位置づけの高まりを示している。

文章博士は令外官で、神亀五年に大学寮に設置された。官位相当は正七位下である。平安時代に入ると、文章科の位置づけが次第に高まり、前述したように、延暦の遣唐使の判官・准録事は文章生出身者であった。弘仁年間を中心とした平安前期には「文章は経国の大業」をスローガンに唐風化政策がとられ、『凌雲集』『文華秀麗集』『経国集』の三大勅撰漢詩文集が編纂された。このようななか、弘仁十一年には、文章博士の官位相当が明経博士を超えて従五位下となった。この時期、文章博士は詔勅を起草するだけでなく、天皇の顧問にもあずかる重要なポストであった。中下級氏族で文章生出身者が学問・実力によって登用され、文人派と呼ばれて天皇専制権力を支え、朝廷のなかで勢力をしめていた。

その後、承和六年には、菅原清公が文章博士出身者として初めて従三位に叙され、貞観二年には、春澄善繩が文章博士出身者として初めて参議となった。

承和の遣唐使には文章生出身者が多かっただけでなく、彼らは文章科と極めて深い関係にある『白氏文集』の受容に果たした役割も大きかったと考えられる。『白氏文集』がその後の日本の漢文学に与えた影響の大きさについては、言うに及ばない。『白氏文集』は、承和五年に、大宰少貳藤原岳守が唐人の貨物を点検して、「元白詩筆」を得て奏上したのが、日本における初見とされる（『日本文徳天皇実録』仁寿元年九月乙未条）。

しかし、承和四年・五年の小野篁と惟良春道との唱和詩に、すでに『白氏文集』、しかも『長慶集』以後の「後集」に出典をもつ語句がみえることが、小島憲之氏によって指摘されている（『古今集以前』塙書房、1976年）。すなわち、『白氏文集』については承和五年以前からある程度日本でも知られ注目されていたと考えられる。その『白氏文集』を全面的に受容するために、文章生出身者が承和の遣唐使には多く選ばれていたのではないだろうか。

以上のように、承和の遣唐使において、その構成員に文章生出身者が多いのは、意図的に選ばれていたことを示していると考えられる。最後の遣唐使任命となった寛平時において、遣唐大使・副使は菅原道真と紀長谷雄であり、兩人とも文章生出身者であった。こうして、遣唐留学生・請益生の学問は、承和の遣唐使をさかいに、明経から文章へと大きく転換したのであった。

また、付け加えると、延暦以降、留学生・請益生より、留学僧・請益僧の方が帰国後著名になる人が多いことがあげられる。

おわりに

以上述べてきたことをまとめてみると、遣唐留学生・請益生には、日本の律令国家のその時々
の需要による学問の受容が意図されていたと考えられる。遣唐使派遣初期には、律令国家の基盤を築くために、律令などの法律や支配イデオロギーである儒教を学ぶ留学生・請益生が送られていた。その後、平安時代に入ると、文章科の隆盛を背景に、延暦の遣唐使から判官や准録事に文章科出身者が登用されるようになる。

そして、承和の遣唐留学生・請益生には、学問受容の観点からみると新しい傾向がみえる。学問が分化し、暦学、陰陽、天文などの留学生・請益生が派遣されるようになる。また、儒教を勉強する明経については、中国における新しい儒教の動きに対応しない硬直化がみえる。一方、唐においても歴史・文学の隆盛がみえるのだが、日本の文章科については、承和の遣唐使において『白氏文集』の受容を意図した留学生・請益生の派遣の可能性が考えられる。こうして、大局的にみると、留学生・請益生の学問は、明経から文章へと大きく変化していった。

実際に派遣された最後の遣唐使となった承和の遣唐留学生がもたらした学問・文化は、『白氏文集』の受容に象徴されるように、その後の平安時代の王朝文化の基礎となっていったと言えるだろう。

遣唐留学生一覧

姓 名	出 国 年	帰 国 年	内 容	出 典
巨勢臣薬	白雉4	不明		日本書紀
永連老人	白雉4	白雉5		日本書紀
坂合部連石積	白雉4	不明	天武朝に新字1部44巻を撰す	日本書紀
高黄金	白雉4?	白雉5?		日本書紀
間人連御厩	斉明3	斉明3	新羅使による入唐を図るも入唐せず	日本書紀
依網連稚子	斉明3	斉明3	新羅使による入唐を図るも入唐せず	日本書紀
筑紫君薩野馬		天智10		日本書紀
韓島勝娑婆		天智10		日本書紀
布師首磐		天智10		日本書紀
土師宿禰甥		天武13	新羅船で帰国	日本書紀
白猪史宝然		天武13	新羅船で帰国	日本書紀
山田史御形（御方）	（新羅留学?）	持統朝	帰国後生徒を教授、周防守	続日本紀・懷風藻・万葉集
吉備真備	養老元	天平6	入唐して経史を学び、帰国して唐礼等を献上。天平勝宝4年遣唐副使	続日本紀など
大和長岡	養老元	天平6?	入唐して刑名の学を学び、帰国後、刪定律令二十條を編纂	続日本紀
阿倍仲麻呂	養老元		入唐して国子監太学で学び、唐朝に仕える	続日本紀など
井真成	養老元?		入唐して唐で没す	墓誌
秦大麻呂	天平5?	天平6?	請益生秦大麻呂、問答六巻を献上	続日本紀
金文学	?	?	『文苑英華』の詩による	文苑英華・異称日本伝
□山人	?	?	『文苑英華』の詩による	文苑英華・異称日本伝
□山人	?	?	『文苑英華』の詩による	文苑英華・異称日本伝
膳大丘	天平勝宝4	?	入唐して国子監を参観し、帰国後大学助教。神護景雲2年7月孔子を文宣王と号することを奏上・許可	続日本紀・令集解
藤原刷雄			入唐せず	続日本紀
船連夫子		天平勝宝6?	天平勝宝6年11月外従五位下、辞して受けず	続日本紀
高内弓		天平宝字7	送渤海使舶で帰国	続日本紀
伊予部家守		宝亀9	入唐して五經大義・切韻・説文の字体を学ぶ。帰国後、孔子の享坐を定め南面とする。大学助教	日本紀略
栗田飽麻呂		延暦24	延暦24年10月正六位上	日本後紀
橘逸勢	延暦23	大同元	入唐して明哲に業を受け、唐中の文人に秀才と呼ばれる。能書、三筆	橘逸勢伝・文徳実録
春苑宿禰玉成	承和5	承和6	陰陽師兼陰陽請益で入唐し、難義一卷を伝え、陰陽寮の諸生に教える	続日本後紀
菅原梶成	承和5	承和6	知乗船事、医学に秀で入唐し医学を学び、帰国後、鍼博士、侍医	文徳実録
刀岐雄貞			暦請益生、承和遣唐使で入唐予定も、亡匿のため流刑	続日本後紀
佐伯安道			暦留学生、承和遣唐使で入唐予定も、亡匿のため流刑	続日本後紀
志斐永世			天文留学生、承和遣唐使で入唐予定も、亡匿のため流刑	続日本後紀
長岑氏	承和5	?	紀伝留学生	入唐求法巡礼行記
伴須賀雄	承和5	承和6	請益生、判官	入唐求法巡礼行記